

## 沖縄における精神文化

### ——祖先崇拝と御願（ウグワン）——

石川 雅健

#### I. はじめに

沖縄では、祖先崇拝が広く振盪しており「トートーメー」と呼ばれ「位牌」そのものが崇拝の対象となっている。

数ある年中行事の中でも、祖先崇拝の気持ちからお盆は重要視され、旧暦7月13日の御迎え（ウンケイ）から15日の御送り（ウークイ）までトートーメー（位牌）がある家、つまり、長男家系には多くの親戚一同が訪れ、トートーメーに手を合わせるのである。

手を合わせ、祖先を思うことで、家族や親類一同などの横の繋がりを確認し、祖父母や曾祖父母そしてさらに先の祖先を思うことで今在る自己の存在に感謝をし、さらに子どもや孫、まだ生まれてこない子孫を思うことで、他者を慈しみかつ自己の行いを正し戒め、各々の絆を再確認することになる。そうした一連の行為・想いが過去—現在—未来の時間軸を超え、凝縮された空間を生むのであろう。

祖先に手を合わせ拝む行為自体あるいはユタが拝みが足りないこと（御願不足：ウグワンプスク）の指摘を機に、祖先霊に眼を向け、耳を傾けることが、翻せば自らの現実を省みることに繋がり、ひいてはそれが自身の「癒し」や「安定」に繋がるのである。

ここでは、沖縄周辺の祖先崇拝の風習と御願の現状とその意味について考えたい。

#### II. 日常生活に見る御願（ウグワン）

##### (1) 新聞・歌曲にみる御願

御願（ウグワン）は日常的にも行われ、その背景にはユタの存在があり、また存在価値・意味は多大である。

因みに、沖縄における主力新聞「沖縄タイムズ」の2001（平成13）年1月1日から2002年1月27日までの約1年の間に掲載された「御願」関連の記事は36件、「ユタ」関連の記事は、28件にのぼる。

この数には、川柳で「御願」「ユタ」が登場するようなものは除いたものの、1月1日新年号にはユタ特集としても組まれており、沖縄の人々にとってユタ存在の必要性や拝むことの日常性がとても重要であることを窺い知ることが出来る。

記事の内容的は、その質や量には差はあるが、「御願」関連では、精糖会社で御嶽と工場内での御願所で安全祈願を執行したのち新年初の操業をはじめた記事、各地区での五穀豊穡や航海安全・大魚を祈願する御願などの報告（玉城、多良間、知念村）、御願を島言葉で披露した「しまぬくとうば語やびら大会」、各地区での御願バーリー（那覇ハーリー、糸満ハーレー、港川ハーレー、佐敷ハーリーなど）、豊年祭（大里村大城区）や海神祭：ウンジャミ（大宜味村塩屋湾、古宇利島）、ドキュメンタリー映画「神人」の紹介、盗難された玉城村船越地区の力石が御願によって戻って

きた記事、今帰仁のノロの話などである。

一方「ユタ」に関しては、エイサーユタが右往左往する劇やユタやシャーマンに関する質問から始まったシンポジウムや基調講演報告、ユタ・祖先崇拜への批判の寄稿文、島くとうば（沖縄口）の詩、民俗学会発表内容（ユタの風習）、ユタ買いをした寄稿文、ユタぐとう（神事）をこなすアルゼンチンの県人会、伝説を語るユタについて民間文芸学会シンポジウム、ユタ事やユタの拝所回りについての投稿文、奄美のユタに関する寄稿文、沖縄文学に登場するユタについて、ホスピスと癌末期患者のユタ買い、ユタの口寄せ（神招き：カンカァイシ）の例、ユタへの教育相談、ユタによる癒しを組み入れたライフドック（人間ドック）の提唱等など、数多くの紹介や投稿・寄稿が掲載されている。

さて、御願（ウグワン）とは、どのようにするのであろうか？

沖縄タイムズ2001年11月28日朝刊1版特集23面に、御願言葉（うぐわんくとうば）が載せられている。それによると、旧暦の一日と一五日には床の間、仏壇など七カ所に「うーとーとう うやふあーふじさい ちゅやきゅうぬ〇ぐわちじゅうぐにち うちゃとーうさぎてーびんどー」と手を合わせ拝むという。意味は「うーとーとう（神仏を拝む時に唱える言葉）、ご先祖様、今日は旧暦の〇月一五日、うちゃとー（御茶禱＝神仏に供えるお茶）をお供えています」ということで、さらにこの後、家庭の繁栄や家族の健康などを願いし、「ちゃー みーまんていうたびみそーち にへーでーびる くりからん また みーまんてい うたびみそーり」（いつも見守っていただき、ありがとうございます）。

「うぐわん」

雨（あみ）ぬ降らんね ウーとーとウ  
畑（はる）ぬできらんね ウーとーとウ奎奎  
拝所（うぐわん）行（じゅい）ち戻（むどう）い まる一日（ひっちー）  
線香（うこー）ぬ煙（くぶ）さぬ涙（なだ）そーそー  
カマドゥ うみなーく タルーヤッチー うみなーく

これからお守り下さい）と結んでいる。

また、同文の中に、「読谷村楚辺の「楚辺誌・民俗編（同誌編集委員会編）」には、「年中行事」の項に正月や旧盆など、その時々のお願言葉を掲載している」と記しており、「正月の『朝御願』では『火ぬ神に花米（はなぐみ）、水、酒、塩、線香を供え『みーどうし んけーてーびと うぐんどうぬとうしん また いーとうしあらちとうらしんそーり やーに んじゅからたが んじゅーあらしんそーり』（新しい年を迎えて、今年も良い年でありますように、家族も健康でありますように）と拝んだ。』。そのあと仏壇、アガイディラ（朝日）を拝む」とあるという。

また、沖縄は民謡の盛んな所で、「島うた」として寿歌、戯れうた、騒ぎ歌、労働歌など様々な沖縄の風土に根差した歌が存在している。その数は3千とも4千とも言われており、その実数は把握できないほど沢山の歌が古から今日に至るまで、庶民の中で生まれ育まれているのである。「正しく歌は世につれ世は歌につれ」である。時代の変遷と共に曲調は変化しているが、沖縄言葉である「うちなーぐち」を用い、沖縄音階を採り入れた曲は今も大きな変化はみられない。

現代沖縄音楽の中心的グループである「りんけんバンド」の1993年に発売されたアルバム『バンジ』の中に収められている曲に御願（ウグワン）そのものをテーマとした「うぐわん」（作詞：桑江良奎、作曲：照屋林賢）というものがある。また、豊年（祈願）祭を歌った「綱曳どー（ちなひちどー）」（作詞：新垣篤、作曲：照屋林賢）も同じアルバムに収められている。以下にそれらふたつの歌詞と対訳を記す。

カマドゥ うみなーく タルーヤッチー うみなーく

海（うみ）ぬやんでいーね ウートートゥ  
魚（いゆ）ぬ採らんね ウートートゥ  
拝所（うぐわん）行（じゅい）ち戻（むどう）らんね まる一日（ひっちー）  
線香（うこー）ぬ煙（くぶ）さぬ涙（なだ）そーそー  
ジラーや うみなーく サンラーウンチュウ うみなーく  
ジラーや うみなーく サンラーウンチュウ うみなーく

七月正月（しちぐわちそうぐわち） ウートートゥ  
ちねーぬあるうっさ ウートートゥ  
親戚（えーか）ぬ家廻（やーみぐ）てい まる一日（ひっちー）  
線香（うこー）ぬ煙（くぶ）さぬ涙（なだ）そーそー  
我（わ）ったアンマー うみなーく いったアンマー うみなーく  
我（わ）ったスーん うみなーく いったスーん うみなーく

「うぐわん」（対訳）

雨が降らなければ、祈願する  
畑が不作なら、祈願する  
一日がかりで、拝み所に行き来する  
線香の煙が目染みて涙が出る  
カマドゥさんも 一安心 タルー兄さんも 一安心  
カマドゥさんも 一安心 タルー兄さんも 一安心

海が荒れたら、祈願する  
魚が採れず不魚なら、祈願する  
一日がかりで、拝所に行き来する  
線香の煙が目染みて涙が出る

ジラーさんも 一安心 サンラー叔父さんも 一安心  
ジラーさんも 一安心 サンラー叔父さんも 一安心

七月（お盆）正月も祈願する  
家族の数だけ祈願する  
一日がかりで、親戚中の家を訪ねる  
線香の煙が目染みて涙が出る

私のお母さんも 一安心 貴方のお母さんも 一安心  
私のお父さんも 一安心 貴方のお父さんも 一安心

「綱曳どー」

六月（るくぐわち）かしちー　　夕（ゆう）さんでえ  
道（みち）じゅねーぬ巡（みぐ）とおーん  
綱曳（ちなひち）どおーい　綱曳（ちなひち）どおー  
綱曳（ちなひち）どおーい　綱曳（ちなひち）どおー  
童心（わらびぐくる）ん　わさわさとう  
綱曳（ちなむ）狂騒（しさわ）じ　落着（うちち）かん  
東（あがり）とう西（いり）ぬ旗頭（はたがしら）  
龍王（るうおう）がなし　目（み）くふあやー  
綱曳（ちなひち）どおーい　綱曳（ちなひち）どおー  
綱曳（ちなひち）どおーい　綱曳（ちなひち）どおー  
畑ぬ技（わざ）ん早々（へーべー）とう  
綱曳（ちなむ）狂騒（しさわ）じ　落着（うちち）かん

うんさ松明（てーでい）　　パーランクー  
雌綱（みーんな）雄綱（うーんな）かにち棒（ぼう）  
勢頭（しーどう）がーえー　角力（しま）とうえー  
綱曳（ちなひち）唄（うた）ん　華（はねー）かさ  
綱曳（ちなひち）問答（むんどう）花咲（はなさ）かさ  
あねあね始（はじ）まいん　夜半綱（やはんじな）

「綱曳どー」（対訳）

旧暦の6月25日、豊年祭の夕方に　綱曳行列がねりあるいている。  
綱曳が始まるぞ。幼い心もワクワクしている。  
ちなむしがウズウズしてもう落ち着かない。

東方、西方、それぞれの旗頭。天上から見れば龍の舞。龍王の目も覚ます。  
綱曳が始まるぞ。畑仕事も今日は早く片付けよう。ちなみしがむずむずして落着かないから。お神酒、松明、パーランクー（小太鼓）雌綱、雄綱、かにち棒  
東方、西方、大将の睨み合い。沖縄相撲。綱曳唄で盛上げよう。綱曳問答に花咲かそう。  
そろそろ夜半の綱曳が始まるぞ。

旧暦の6月25日、豊年祭の夕方に　綱曳行列がねりあるいている。  
綱曳が始まるぞ。幼い心もワクワクしている。  
ちなむしがウズウズしてもう落ち着かない。

ここでは沖縄ポップスと呼ばれるりんけんバンドの歌詞を記した。「うぐわん」では、歌詞の内容にも記されていたように、五穀豊穡や大漁祈願などについて一日中拝所巡りをすることで叔父さんも、お母さんもお父さんも安心できるとしている。また後者の「綱曳

どー」では年中行事である「雨の祈願綱曳き（アミシの願）」を題材に五穀豊穡を願い、その行事自体が心わくわくさせるものとしている。

いずれにしても、これらから沖縄の人々が生活に密着しコミュニケーション媒体として

の文字（新聞）や唄（歌詞）にも、あるいは生活に密着し自と他もしくは内と外とを繋ぐものだからこそ、彼らの文化や風習をそこに表現し受け入れ合っているといえよう。

## （2）ユタによる御願と祭壇

ユタの祭壇について佐々木は、奄美地域では明らかに神社神道的な構成を示しているのに対して、台湾近くに位置する与那国島では奄美と全く異なる様相を呈し、石垣、宮古、沖縄本島と北にさかのぼるにしたがって、祭壇は奄美的要素を付加するという。

具体的には、「奄美型」と呼ばれる奄美各島の祭壇はおしなべて四段ないし五段からなり、最上段部に注連縄を張り、その下に白木の祀殿（シデン；お宮）が、そしてその内部か前にご神体の神鏡が置かれる。祭壇の背後もしくは横の壁面には、天照大神を中心に左右に春日大神、八幡大神を配した掛け軸が掛けられ、各段には榊やススキを生けた花瓶と香炉、盛り塩、水のほか種々の供物が置かれる。

一方、「与那国型」と名付けられる与那国のユタの祭壇は単純素朴で、部屋の片隅に置かれた机の上もしくは床の間に神霊が依り憑く聖樹とされる亜熱帯灌木クロトンの樹枝を生けたグラスか花瓶を一对、その前に盛り塩、水、香炉を供えているのみである。

沖縄本島の場合は、ヴァリエーションに富み、最上段に千手観音像や七福神、天照大神などの絵図を掛け置き、神鏡や祀殿は在ったり無かったりだが、緑樹や花を生けた花瓶、盛り塩、水を供えている。そして、宮古や石垣の祭壇構成は与那国型と奄美（沖縄本島）型の混在で「中間型」と呼ばれている。

さらに佐々木は、ユタの祭壇構成の地域的差異がカミの観念とどのように関わっているのかについて、御願の仕方を取り上げ、大まかにまとめると次のように述べている。

簡素な与那国型の祭壇を持つ与那国のユタは、カミに願いごとをするときには、祭壇に線香をあげ、教えてくれるように念じ、拝す

る。するとまもなく肌に冷たい風のようなものを感じ、クロトンの樹枝の間にカミがすつと降りるか、クロトンの樹枝のあたりからカミの声が聞こえてくるという。クロトンの樹枝はカミが来臨し憑依する依代なのである。

カミはユタの祭壇に常駐するのではなく、ユタの招きに応じてユタノヤー（ユタの家）の祭壇を訪ね、しばらくクロトンの樹枝に依り憑いてユタと直接交流し、役目が終われば離れ去るのである。そして自由自在に空間を移動するカミの機微に通じ、これ进行操作し、自由に交流する能力をもつ者がユタ（シャーマン）に他ならない。自由無碍に去来するカミに比して、鏡や祀殿や神殿に鎮座する神は固定的であり、権威は大であるがカミのもつ自在性が人間の恣意によって制限されているようにもみえる、としている。

筆者が平成13年8月、祖先霊をお迎えするウンケイの日に訪問した沖縄本島那覇市内のユタの祭壇は、佐々木が述べている「中間型」ではあるものの、「奄美型」というよりむしろ「与那国型」に近い。つまり、以下に示した「写真1 祭壇」「写真2 祭壇正面」にある



写真1 祭壇



写真2 祭壇（正面）

ように、祭壇中央には額に入った神、その左右に櫛が2対、手前には香炉とお茶、水、盛り塩が配されているのみのシンプルなものであった。

蛇足であるが、沖縄本島の中でも最高に霊験あらたかなる斎場御嶽付近に建てた「沖縄内観研修所」からみた神々の住むといわれる「久高島」全貌（写真3）、久高島内で開かれ、全国に74ある山村留学施設のうち日本最南端にある久高島留学センター（写真4）、久高島一の御嶽（クボーウタキ）（写真5～8）を添付した。写真3を撮った場所である沖縄内観研修所も写真4の山村留学センターは写真5～8の古来からの「御嶽」に対し「現代版ここを癒す御嶽」ともいえよう。また、それらが由緒ある御嶽（斎場御嶽とクボー御嶽）の近くに位置するのも偶然であろうか。はたまた何かしら意図されたものであろうか。詳細については未確認の点が多いため、設立経緯や現状などについては別稿にてまとめ報告したい。

また御願の時間帯については、一般的にユタが依頼者の災いを外すために御願（ウグワン）する場合、潮の引いていく時刻を選ぶといわれる。個人や家族の災いが切り離された単独の事象として扱われるのではなく、生まれや死者との関係、天体の運行、潮の流れ、時間と方位など様々な象徴体系の複合の中に定位される。

名嘉真宜勝は人生儀礼について儀式の内容

だけでなく、それぞれの祈願について風習や禁忌なども記した。例えば、妊娠祈願について、ユタの判断にしたがって祈願するというものだけでなく、旧暦1月16日の夕方、ノロを頼んでダカリ橋というところで妊娠祈願をし、夫婦でその橋を3回往復したのち、供え物のご馳走を持って子宝に恵まれた家を訪問し、それにあやかるといふ沖縄久米島比屋定のミシクーガ（見せ卵）の風習や結婚式をやり直す宮古の狩俣の例を挙げている。

日本本土でも安産祈願としてのお犬様参りやお宮参りなどからはじまり七五三、成人式喜寿や米寿など成長や長生きを祝もの、厄払い、結婚式や葬式や法事などが執り行われ、熱心な人もいるが、沖縄ではより日常的であり、御願が付随し、ユタ（巫女）あるいはノロ（祝女）の介在があることが特徴的であろう。

日本本土での年中行事・人生儀礼は、初詣、正月、お彼岸、お盆などはあるものの、単なる休暇としての意識が大であり、神社仏閣や祖先崇拜も含めて宗教的交わりはほとんど感じられない。しかし、沖縄では、前述した新聞や歌詞にもみられるように、また、祭りや行事が多く継続されているように、沖縄のところがそれぞれの人のの中に浸透している。

### （3）聖地巡礼とその意味

聖地巡礼（拝所巡礼）は、「ウガンマーイ」と呼ばれ神々に対する御礼と今後の祈願を主としたもので、霊能者であるユタが、もしくは依頼人と一緒に拝所（各地のウタキ（御嶽）、グスク、ガマ（洞窟）、カー（井泉）、アジシー（古墓）を御願（ウグワン）して巡るのが一般的のようである。そしてどの拝所を拝むかという点については、通常「シママーイ」と呼ばれる地方の拝所を拝むが、地域（地方）によって、また判示（霊示）によっても異なるといわれている。

沖縄本島その中でも中心である首里近辺の人達は、十二干支（「慈眼院：子、丑、寅、午生まれの守護神を守る」「万松院：卯、辰、巳年生まれ」の守護神を守る）「安国寺：酉年生ま



写真3 沖縄本島(斎場御嶽付近)からみた久高島



写真4 久高島内の山村留学施設(久高島留学センター)

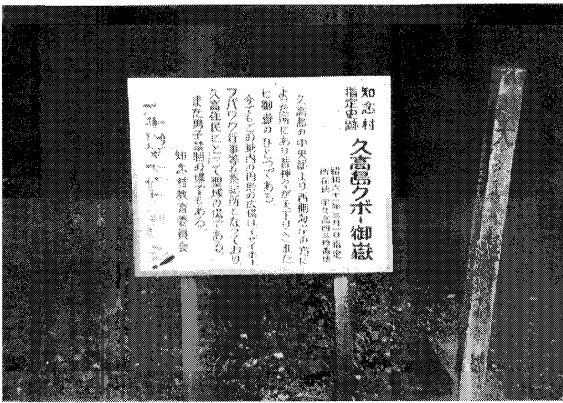


写真5 久高島クボ御嶽(うたぎ)



写真6 久高島クボ御嶽(うたぎ)入り口

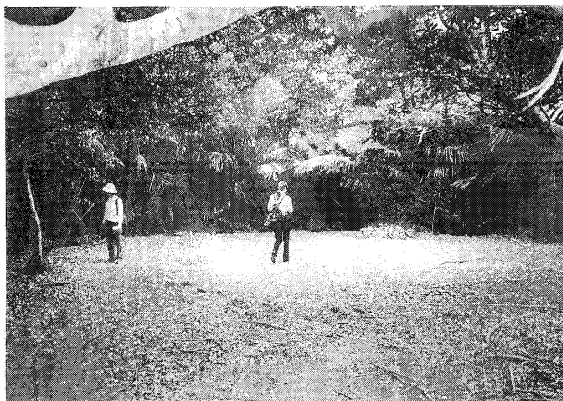


写真7 久高島クボ御嶽(うたぎ)広場



写真8 久高島クボ御嶽(うたぎ)拝所

れの守護神を守る」「西来院：午、亥、戌年生  
まれの守護神を守る」「盛光寺：未、申年生ま  
れの守護神を守る」「護国寺：戦後十二支全守  
護神を祭る」)を参拝するのもそのひとつであ  
る。

巡礼・拝みは何日もかかるため、それだけ  
ユタに支払われる金銭は膨大となり、このこ  
とがユタの弾圧や制圧に繋がるのであるが、  
一方で巡礼・拝みが無くならないのはそれだ  
けユタに依存し任せることで自らが幸せある

いはいは何かの指針を得られるということになるだろう。

自らのあるいはユタに依存をして拝所を廻り、御願をすることは、どのような意味を持つのであろうか。

依頼者自身、時間とお金をかけユタと一緒に巡礼することは、その行為そのものが依頼者（カウンセリングでいうクライアント）自身の生き方や行為などを回想し、改めて自らを省みることとなり、ましてやその対象が霊験あらたかな神々となれば、なおさらのこと真摯にそして素直に対峙することになる。しかし、その御願がひとつやふたつの拝所でなく、それがいくつもでなされることは、簡単に物事が解決されず、加えて多くの神あるいは祖先に見守られ、却って判示（ハンジ）に重みが増すのである。

「巡礼」つまり文字通り「歩き廻る」ことは、現世で「浮き足立った」人間が「地に足をつける」ために、ある時は自問自答を繰り返し、またある時は、高額な「お足」を要求する（金銭的見返りを要求しない者も居ると聞くが）ユタが「足手まといな」依頼者（相談者）を連れ、判示（ハンジ）のもとに筋正し（シジタダシ）をし、忌まわしい過去から「足を洗う」のである。

もう一点、「拝む」という行為には、「手を合わせる」という動作を伴うのが通常である。ここでも、前述の「足」同様、「手」の意味を述べると、手の仕事として「触る（さわる）」「触れる（ふれる）」という身体接触が挙げられるが、正しく一方の手がもう一方に触れることで「拝む」のであり、それは今存在する「自分自身」が過去や未来の「もうひとりの自分」に触れることに繋がるのである。そして「触られたくない」個所にもユタの力を借りて触ることになり、「手当て」がされることになる。

#### （4）御願不足（ウグワンブスク）と祖先の祟り

御願（ウグワン）が十分されないと、本人や家族に病気や事故などの災いがあるといわ

れている。これがいわゆる「祖先の祟り」である。

沖縄タイムス1997年6月19日朝刊1版オピニオンに載った沖縄女性史家である宮城晴美氏は、「トートーメーの問題で何人ものユタの家を行脚させられ、多額の金をつぎ込んでウグワンに奔走する女性は少なくない」という。さらに、「間違ったトートーメーの持ち方をしている、あるいは持つべきトートーメーを持っていないなど、ユタの宣告は夫や子どもへの祟りを暗示し、主婦たちを震え上がらせるというのである。そのため女性達は可能な限り時間と費用を充てて、ウグワンに専念することになるが、こうしたことがいつしか自分の娘や嫁へと受け継がれ再生産されていることを、同じ女性としてどのようにとらえればよいのか、気持ちは複雑である。

（中略）男兄弟が兵隊に行って死んでしまい残された女きょうだいが親の財産とトートーメーを継いだ、と言っては親戚が問題にしたり、夫が戦死したあと妻が再婚し、先夫の供養がされていないために子どもが病気をした、あるいは会ったこともない戦死した遠縁のおじさんのトートーメーを継がないと近々夫や子殿にが“祟り”がくるといわれたなど

（中略）こうした“祟り”があるとかないとかの原因がすべての女性達の供養の在り方と死者との関係において問題にされ、肉親である圧倒的多数の男性達は橋から眺めているに過ぎない。（攻略）」

トートーメーは必ず、長男、長男がいなければ二男の二男、その人がいなければ男系の血筋の男子に継がれるという仕組みになっているから、嫁にきた女性はそのシステムを維持する役割を課せられている。

こうした「祟り」から自身や家族身を守るために、女性はウグワンをしユタ通い（ユタ買い）をすることになる。

池上は、拝みの不足である「御願不足」を「単に量的な問題ではなく、情緒的関係の破綻したなかで苦しみ、必死に呼びかけ、訴えかけてくるカミや祖先の存在を、よびかけら



れている当人が悟れないでいるという、いわば『共苦共感』の能力が欠けていることを意味する」とし、さらにこうしたとき、「カミや祖先はさまざまな方法で『シラシ(知らせ)』を送ってくる」という。つまり、「タチファ(立霊)」といって、不足事や願い事のあるカミや祖先が、家の前に立つことがある」「『ウマカキ』(頼りかかってくること)や『マニカキ』(同じ苦しみを真似させられること)『アシマトウイカキーン』(足手まといをかける)などという言い方もある。カミや祖先が『共苦共感』を求めて、すがりつき、まとわりついてくる様子がリアルである」と付け足している。

この「祖先の祟り」について、心理学・精神医学の立場から、又吉は、ウィスコンシン大学の心理学者ハーローによるアカゲザルを用いた「母性愛剥奪実験(マターナル・ディプロベーション)」を挙げ、「甘えたくても甘えられない状態は、祖先代々から子々孫々に渡って、何も手を打たなければ、子孫が絶滅されるまで受け継がれるものであり、これが『祖先の祟り』であるとしている。

つまり、「甘えたくても甘えられない」という状態は、拗ね、僻み、恨み、ふて腐れ、自棄糞の心意を生み出し、そんな心意に強く支配されていると、人間関係はうまくいかず、何時もイライラし、事故も起こしやすく、精神的ストレスも多く、不幸や災難、病気に見舞われやすくなる、という。要するに一言で言うと書名のとおりの「正しい『甘え』が心を癒す」と提唱する。

祈ることと心理療法あるいは癒されることについて、林俊子は「癒されることの始原の姿は、未分化な、だからこそ、多くの要素をもった神話の世界であり、神の働く世界であり、行為としては「祈ること」であったが、それは急速な技術革新の時代においても枯れることなく、主観的内的体験の世界で生き続けて必要とされている」とした上で、古代ギリシャ世界の人々の治療観について、「治療神という超越者の存在、働きによって癒されるというのは、自分が『治る』とかだれかが

『治す』という次元とは異なって、河合隼雄(1989)は『治していただく』という宗教的行為に近いものであったと病む人の受けとめかたを表現している。」さらにその後、ユダヤ社会に「病むものを呪われた者として社会から追放していた疾病観を覆す治療神が現れる。彼は『ハプトー』(haptoギリシャ語=手を触れる)によって癒しを行った。山形孝夫は、病む者が彼に触れてもらうということは、聖なる異次元の世界に接触することを意味し、癒しの力はここから生まれるものであったと述べている」とし、祈ることと触れることについて言及している。そして、今日における祈りについて「人間は肉体と精神、および両者を生かす霊(あるいは『たましい』)の三つからなる全体であるとし、1個の人格の変容、治療を目ざす限り、肉体と精神を治療するこれまでの心理療法と、霊的次元と深くかわる宗教の双方の協力が今後必要とされるであろう。」と述べている。

神あるいは絶対的存在を信じ、手を合わせ拝むことで、神あるいは絶対的存在の保護下にあって包み込まれ、守られ、繋がる感覚は、沖縄では「ウートー」と御願をすることになり、祟りから逃れ、開放されることになるのである。

#### IV. おわりに

沖縄は今でこそ「県」として日本に属しているが、数々の侵略や属国としての過去を持つ。しかし、その反面多くの国々との交流も古くからあり、その分、多種多様な文化が沖縄にもたらされたのも事実である。

沖縄をアジアの中にあるひとつの国としてとらえたとき、古来沖縄(琉球)の人々は、自らの文化を守りつつ、侵襲してくる言葉や音楽、衣・食・住、そして精神的文化などを、沖縄ならではのものに変換し、いわゆる「ちゃんぷるー(混ぜこぜ)」として自分たちのものになっている。

今回、沖縄の精神文化における祖先崇拝や

拝み「御願（ウグワン）」に焦点を置き、その現状と意味を探ってみた。

そして、その担い手としてのユタ（シャーマン）は、隣の国「韓国」や「台湾」「中国」などにおいても未だ健在と聞く。

また、日本国内においては沖縄だけでなく東北も「イタコ」というシャーマンが存在するが、その地の生活文化、例えば家の継承ひとつをとってみても、東北では姉家督や婿養子を認めているものの、沖縄では女系を交えることを忌避しており、韓国の文化・風習と酷似しているといわれている。

さらに、韓国のシャーマニズムは、ムーダン（巫堂）を介して人間のあらゆる問題を解決しようとする。この点についても、沖縄のユタと通じるところがあり、こうした点からも、沖縄だけでなく、他国のシャーマンとの関連や相違についても今後調べてみなければならないと考えている。加えて今回、ユタやムーダンといったシャーマンの精神状態と受け手としてのクライアントへの影響や癒しの状況に直接入り込むことが出来ず、表面的な部分あるいは文献やインターネットの情報を駆使したもので終わってしまった。

今後はそれらを足がかりとして現場に入りこみフィールドや面接からと客観的指標としての心理検査などからのアプローチを用い、探求していくことが今後の課題であると考えらる。

\*本稿は、平成13年度名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期認定論文の一部に修正加筆をしました。

## 参考・引用文献

- 阿部美哉 世界の宗教 放送大学教育振興会 1995  
 赤嶺政信 民間の宗教者 講座日本の民俗学7 神と靈魂の民俗 pp.147-160  
 所収 雄山閣出版 1997  
 大宮司信 「やまい」と「いやし」からみた祈祷精神 病 ころの科学 43巻 pp.60-64 所収 日本評論社 1992

- 福島哲夫 塩月亮子 「かたり」としての沖縄シャーマニズム その癒しの生成についての試論 プシケー日本ユングクラブ会報第11号 pp.73-91 所収 新曜社 1992  
 月刊沖縄社編集 ユタと霊界の不思議な話 月刊沖縄社 1992  
 林俊子 祈りと心理療法 氏原寛 小川捷之 東山 紘久 村瀬孝雄 山中康裕 共編 心理臨床大事典 pp.082-1084 培風館 1992  
 池上永一 バガージマヌパナス 文藝春秋社 1998  
 池上良正 民族宗教と救い 淡交社 1992  
 石川雅健 沖縄における民間療法の心理学的研究 ユタに関するアンケート調査結果について 名古屋女子文化短期大学研究紀要第22集 1996  
 石川雅健 沖縄における精神文化に関する一考 ―ユタの役割と継降り（チヂウリ）― 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期認定論文 2000  
 石川雅健 沖縄における精神文化に関する一考 ―アンケート調査と文藝作品から見たユタの役割― 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期認定論文 2001  
 石川雅健 沖縄における精神文化に関する一考 ―祖先崇拝と御願（ウグワン）― 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期認定論文 2002  
 石川雅健 沖縄における神文化に関する研究 ―文藝作品にみるシャーマニズム― 名古屋女子文化短期大学研究紀要第27集 2002  
 北山修編 イマーゴ8月臨時増刊号 第3巻第9号 総特集ことばの心理学 青土社 1992  
 又吉正治 琉球文化の精神分析1 マブイとユタの世界 月刊沖縄社 1987  
 又吉正治 琉球文化の精神分析2 先祖のたたりと御願（ウグワン） 月刊沖縄社 1987  
 又吉正治 琉球文化の精神分析3 トートーメーの継ぎ方 月刊沖縄社 1994  
 又吉正治 正しい「甘え」が心を癒す 文芸社 1998  
 Michael Harner 1980 The Way of the Shaman, John Brockman Associates Inc. 吉福信逸監修 高岡よし子訳 シャーマンへの道 平河出版社 1989  
 宮田登 民俗文化史 放送大学教育振興会 1995  
 名嘉真宜勝 沖縄の人生儀礼と墓 沖縄文化社 2000 pp.6-8  
 西村康 シャーマン文化と精神医療 荻野恒一編 文化と精神病理 所収 引文社 1978  
 沖縄県・沖縄観光連盟 ほっとあいランド沖縄 1993  
 沖縄タイムズ 2001.1.1~2002.1.27  
 沖縄情報局 Okinawajoho Net  
 親富祖勝巳 シャーマン信仰と治療 沖縄のユタを中心に ころの科学 43巻 pp.65-69 所収 日本評論社 1992

- 佐々木宏幹 チャネラーは現代のシャーマンか  
Q A11月号別冊（第96号） 石川順一編集  
pp.106-117 平凡社 1991
- 佐々木宏幹 シャーマニズム 中新書587 中央公論社 1993
- 佐々木宏幹 聖と呪力の人類学 講談社学術文庫 1996
- 下野敏見 南九州のシャーマニズム 日本民俗文化資料集成 6 巫女の世界 谷川健一編集  
pp.307-331 所収 三一書房 1989
- 下野敏見 南九州の民俗を探る カミとシャーマンと芸能 八重岳書房 1984
- 高江州義英 沖縄の精神風土と祖霊信仰 南島のシャーマニズムと他界観 imago 第3巻第2号  
所収 青土社 1992
- 高江州義英 呪術と精神医療 南島巫女をめぐる現況 岩波講座宗教と科学 8 身体・宗教・性 河合隼雄他編 pp.81-112 所収 岩波書店 1993
- 高石利博 民間信仰と精神科医療 沖縄の文化と精神衛生 佐々木雄司編 弘文堂 pp.23-44 所収 1984
- 竹田旦 祖先崇拜の比較民俗学 吉川弘文館 1995
- 谷川健一 山下欣一 荒木博之 波平恵美子 編集 共同討議南島のフォークロア 方英社 1984
- 友寄隆静 なぜユタを信じるかくその実証的研究＞月刊沖縄社 1981
- 氏原寛 小川捷之 東山紘久 村瀬孝雄 山中康裕 共編 心理臨床大事典 培風館 1992
- 山形孝夫 病と癒し 傷ついたシャーマン 岩波講座宗教と科学 8 身体・宗教・性 河合隼雄他編 pp.81-112 所収 岩波書店 1993
- 山下欣一 南島研究の現状 南海日日新聞 1993